厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）
平成 28 年度分担研究報告書

医療機関等における薬剤耐性菌の感染制御に関する研究

5．国民の薬剤耐性に関する意識についての研究

研究分担者
大曲　貴夫（国立国際医療研究センター・国際感染症センター・センター長）

研究協力者
鎌田 一宏（国立国際医療研究センター・国際感染症センター）
徳田　安春（群星沖縄臨床研修センター・センター

研究要旨

欧州や米国では、アンケート調査を通して国民の薬剤耐性（AMR）に関する知識と普及啓発の効果を評価し、その内容の再編や啓発対象をより具体化している。対して日本では国民全体を対象にした、薬剤耐性（AMR）に関する調査は行われていない。本研究では、意識調査研究を用いて、薬剤耐性（AMR）に関する国民の知識を評価・分析し、より効率的な普及啓発を目指し、その普及啓発に伴う国民の理解・知識の推移をみた。

本調査では、「風邪やインフルエンザに抗生物質は効果的だ」といった誤った知識を有するものが 40.6%、「薬剤耐性」という言葉を聞いたことがあるものが 41.6%であり、今後の正しい知識の普及の必要性が示唆された。その一方で、正しい知識を得たことで何らかの思考・行動変容に繋がったものは半数を超えていた(58.9%)。

本調査は国民の意識の中で AMR 対策の障壁となり得るものを示唆していると共に、適切な情報の提供が国民の行動変容につながりうることを示唆している。

A．研究目的

2015 年 5 月、世界保健総会で「薬剤耐性(AMR)に関するグローバル・アクション・プラン」（国際行動計画）が

採択され、これを受け日本では、2016年4月5日に「薬剤耐性（AMR）アクションプラン」が策定された。このアクションプランの6分野にわたって掲げられる目標の１つに、国民の薬剤耐性（AMR）に関する知識や理解に関する普及啓発があげられている。
欧州や米国では、国を挙げた薬剤耐性に関する普及啓発が行われる中で、アンケート調査を通して国民の薬剤耐性（AMR）に関する知識の評価のみならず、普及啓発の効果を評価し、その内容の再編や啓発対象をより具体化している。対して日本では国民全体を対象にした、薬剤耐性（AMR）に関する調査は行われていない。
本研究では、意識調査研究を用いて、薬剤耐性（AMR）に関する国民の知識を評価・分析し、より効率的な普及啓発を目指し、その普及啓発に伴う国民の理解・知識の推移をみるために実施した。

B. 研究方法

期間：2017/3/17~2017/3/21
対象：インテージリサーチ社に登録されているモニター（医療関係者は除いた）
実施機関：インテージリサーチ社
実施内容：『抗生物質に関するアンケート』と評した全 24 問のアンケート（資料 2）

C. 研究結果

調査依頼数は 21093 人、そのうち有効回答を得られたものは 3390 人(16.1%)であった。医療従事者は全体の中から排除した。有効回答者の全質問に対する回答時間は 18 分 12 秒であった。

Ⅰ. 回答者の属性

回答者の属性は、性別は女性が 48.8%、男性が 51.2%であった。年齢は、40~54 歳が 32.7%、55~69 歳が 31.4%、35~39 歳が 28.1%を占め、35~69 歳が全体の 9 割以上を占めた。職種は、専業主婦・主夫が 14.5%を占め、これにその他の職業(13.5%)、そのほか製造業(8.2%)、その他サービス(7.6%)が続いた。

最終学歴では、高校卒が最も多く(37.3%)、続いて大学卒(31.6%)であった。毎日インターネットを使用している回答者は、全体の 85.5%であった。

Ⅱ. 抗菌薬の服薬状況と知識・認識について

１. 抗菌薬の服薬状況について（図 1）

過去 12 ヶ月での抗菌薬使用（錠剤、粉末、シロップなど形状を問わない）状況は 46.2%（1,566 人）であった。

その抗菌薬使用経験者のいちばん

最近飲んだ抗生物質の入手経路を見てみると、病院から処方された割合が84.0%、診療所の医師から処方された割合が9.5%であった（図2）。

抗菌薬を飲むことになった理由を見てみると、風邪(45.5%)、その他(21.6%)、インフルエンザ(11.6%)、発熱(10.7%)の順となっていた（図3）。

また自宅に抗生物質を保管しているのは、全体の11.7%であった。抗菌薬の自己中断や用量用法を加減したことのある人は、全体の23.6%であった（図4）。

さらに保管している抗生物質を、自分で使ったことがあるのは75.8%、家族や友人にあげて使ったことがあるのは26.5%であった（図５）。

２．　抗菌薬に関する知識・認識について

「抗生物質はウイルスをやっつける」「風邪やインフルエンザに抗生物質は効果的だ」の設問に対して、「正しい」と回答したのは、それぞれ46.8%、40.6%であった。全体の38.8%は抗菌薬が副作用を持ち合わせていることを認識していた（図６）。また次世代のために抗菌薬の乱用を控えるべきだとの考えに同調したものは、50.4%いた（図７）。

Ⅲ．抗菌薬に関する情報について

１．　抗菌薬の情報について

この１年間に「不必要に抗生物質を飲んではいけない」という情報認知の機会は57.5%になかった（図8）。

対して、「機会があった」「既に知っていた」ものについては、情報源として新聞やテレビのニュース番組が最も多く(25.7%)、これに医師(19.1%)、家族または友達(11.6%)、ラジオ(11.1%)が続いた（図9）。

さらに、これらの情報を得たことで抗菌薬への考え方が変わったものは、58.9%におよんだ。そのうちの 44.5%が抗生物質を必要だと思うときには医師へ相談するようになっていた。そのほか、抗生物質の自己中断をやめる(32.2%)、医師以外の処方でない抗菌薬内服の自粛(29.2%)といった行動変容が見られた（図10）。

２．　抗菌薬の情報源について

抗生物質に関するきちんとした情報を得ようとするとき、利用する情報源は医師が最も多く(73.5%)、薬剤師(41.6%)、病院(21.4%)、その他の健康関連のインターネットサイト(17.1%)がこれに続いた（図11）。

Ⅳ．薬剤耐性の認知度

薬剤耐性という言葉の認知度は、41.6%であった（図12）。その一方で、「薬剤耐性とは、人が抗生物質に効き

にくい体質や免疫、耐性を持ってしまうことである」という誤った認識を41.7%が持っていた（図１３）。

また、薬剤耐性の原因としては、抗生物質の過剰な使用(46.5%)、抗生物質の不必要な使用(36.8%)との理解を持っていた（図１４）。

D. 考察

一般国民を対象にした抗菌薬に関するアンケート調査を実施した。

インターネットを通したモニター対象調査であるため代表性という点で制限はあるが、統計上の各都道府県の人口比率、年齢比率を参考にモニターを抽出した。

日本では 2016 年度に策定された薬剤耐性アクションプランにのっとり、医療者向けの抗菌薬使用に関する手引きの発行などが進む中、一般国民の抗菌薬に関する意識を評価する意義は大きい。

本調査では、「風邪やインフルエンザに抗生物質は効果的だ」といった誤った知識を有するものが 40.6%、「薬剤耐性」という言葉を聞いたことがあるものが 41.6%であり、今後の正しい知識の普及の必要性が示唆された。一方で、正しい知識を得たことで何らかの思考・行動変容に繋がったものは半数を超え(58.9%)、今後、一般国民に向けた普及啓発を実施する中で一定の効果が期待される。

文献

1) ANTIMICROBIAL RESISTANCE REPORT. Special Eurobarometer 407. November 2013

2) Non-prescription antimicrobial use in a primary care population in the United States: evidence for action. AAC Accepted Manuscript Posted Online 11 July 2016

E. 結論

インターネットを通したモニター対象調査を行い、一般国民の抗菌薬に関する意識を評価した。「薬剤耐性」に関する正しい知識の普及の必要性が示唆された。正しい知識を得ることで思考・行動変容に繋がることが示唆され、国民に向けた普及啓発による効果が期待される。

F. 健康危険情報

該当無し

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H.　知的財産権の出願・登録状況　　なし

図1

Q7　あなたは、この1年間で何らかの「抗生物質」を服用しましたか？

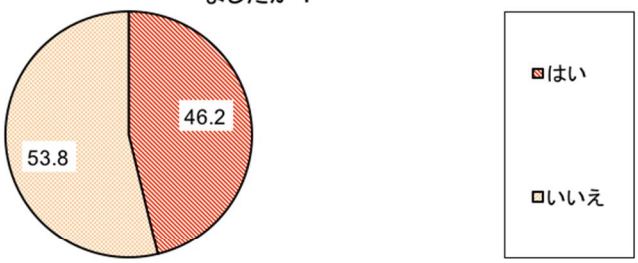


図2

Q8　あなたが、いちばん最近飲んだ抗生物質は、どこから入手したものですか。（回答は1つ）この1年間で、抗生物質を服用したとお答えの方にうかがいます。

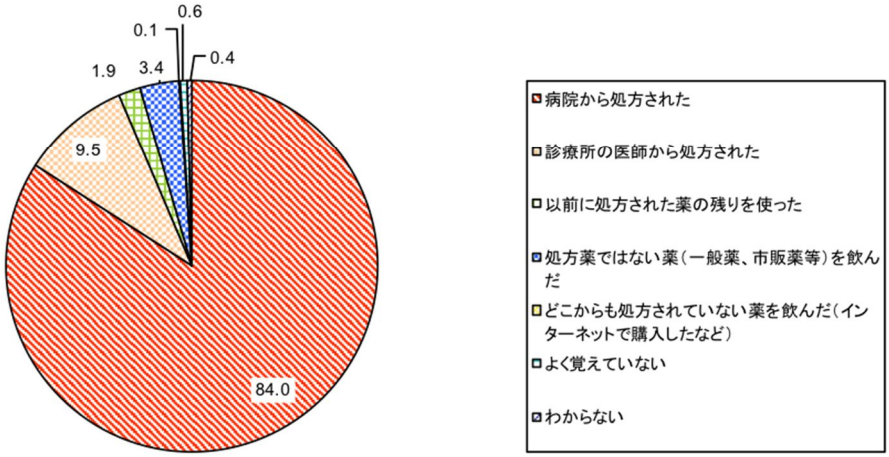


図3

Q9 あなたが抗生物質を飲むことになったのはなぜですか。（回答はいくつでも）

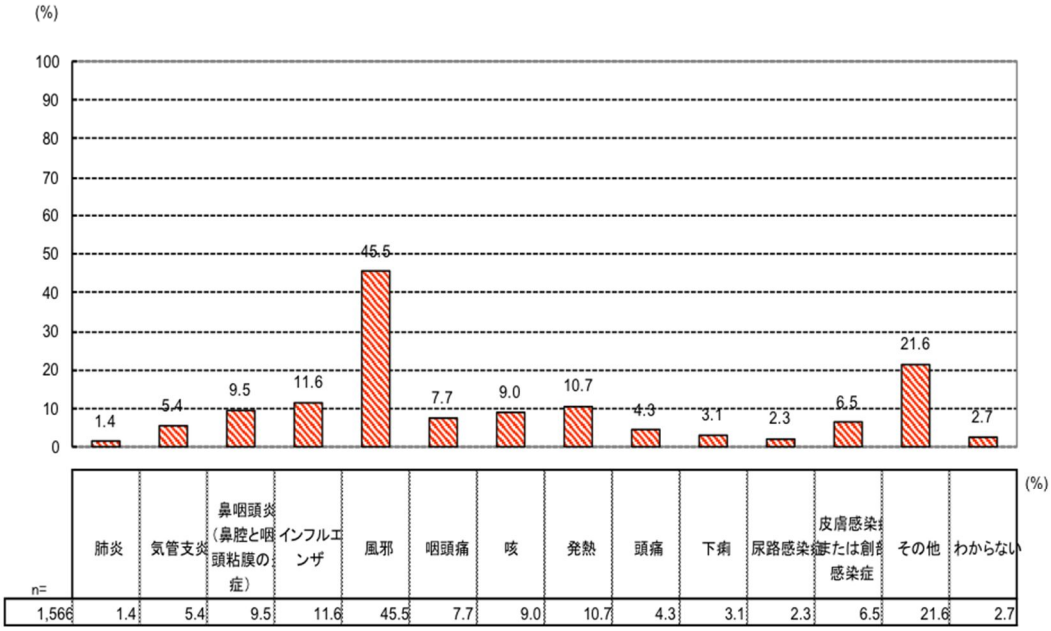


図4

Q20 次の内容は、あなたにあてはまりますか。（回答は1つ）

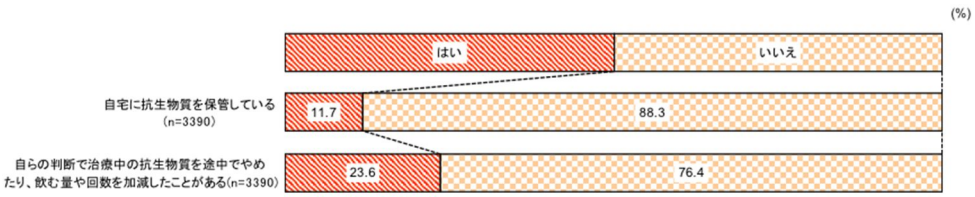


図5

Q21 自宅に抗生物質を保管している方にうかがいます。（回答は1つ）

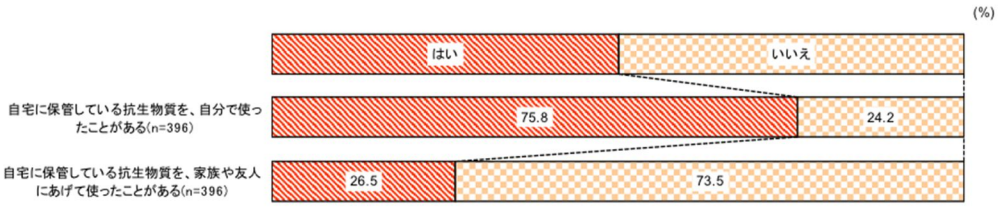
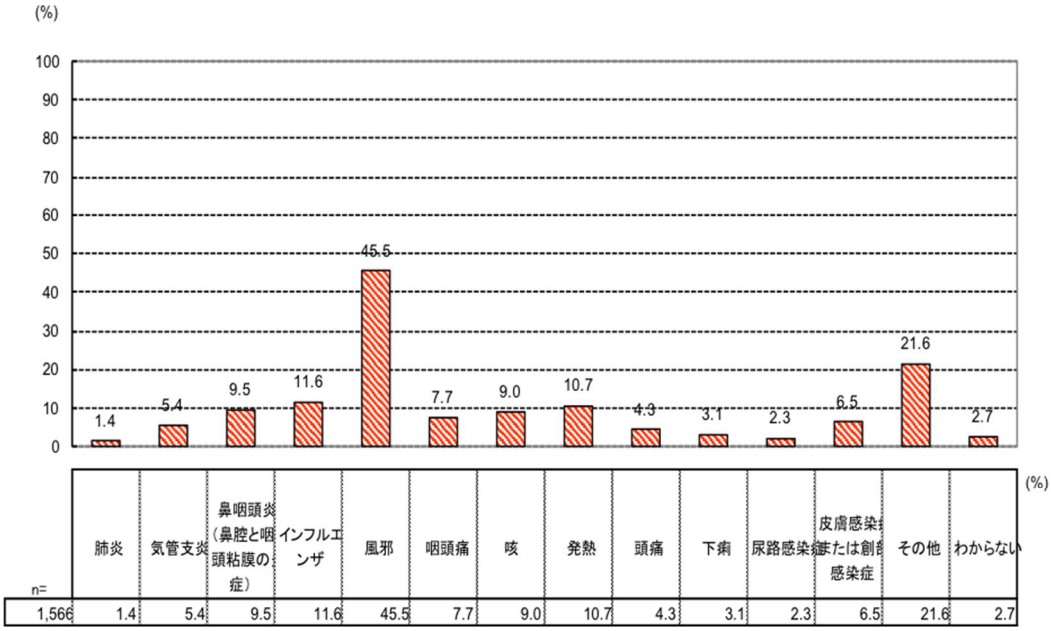


図3

Q9 あなたが抗生物質を飲むことになったのはなぜですか。（回答はいくつでも）



n=	肺炎	気管支炎	鼻咽頭炎（鼻腔と咽頭粘膜の症）	インフルエンザ	風邪	咽頭痛	咳	発熱	頭痛	下痢	尿路感染症	皮膚感染症または創部感染症	その他	わからない
1,566	1.4	5.4	9.5	11.6	45.5	7.7	9.0	10.7	4.3	3.1	2.3	6.5	21.6	2.7

図4

Q20 次の内容は、あなたにあてはまりますか。（回答は1つ）

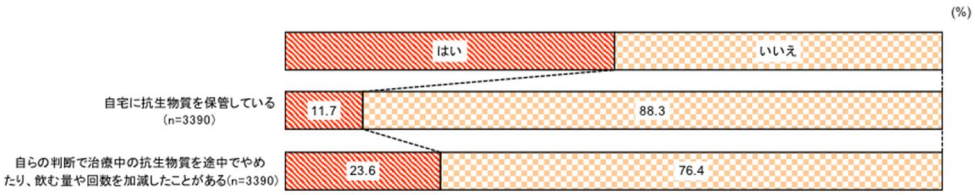


図5

Q21 自宅に抗生物質を保管している方にうかがいます。（回答は1つ）

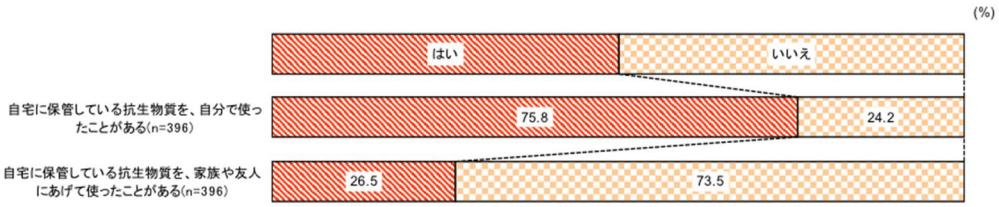


図6

Q10　次の内容について、あなたはどのように思いますか。(n=3390)

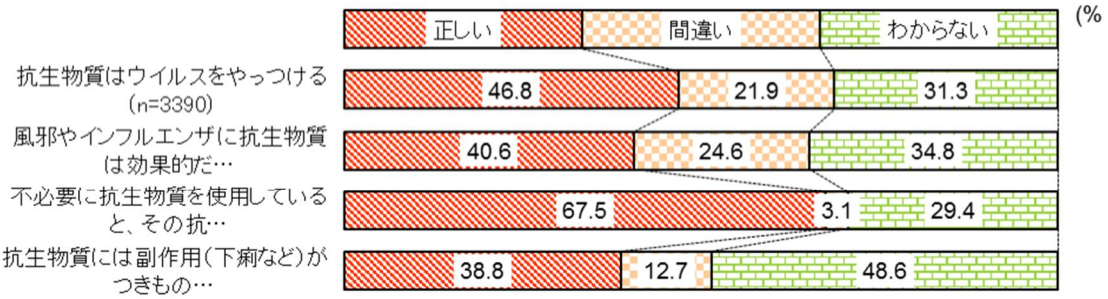


図7　Q11　次の世代にも抗生物質の効果が続くよう、誰もが抗生物質の乱用に気を付けるべきだ。

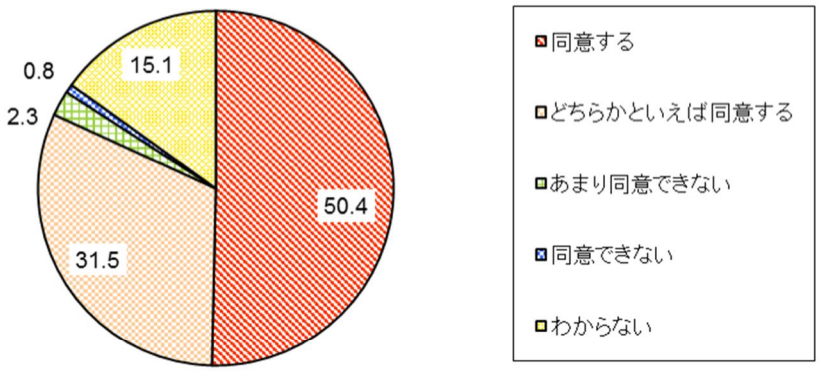


図8　Q12　あなたはこの1年間で、「不必要に抗生物質を飲んではいけない（例：風邪やインフルエンザの際に服用してはいけない等）」といった情報を知る機会がありましたか。

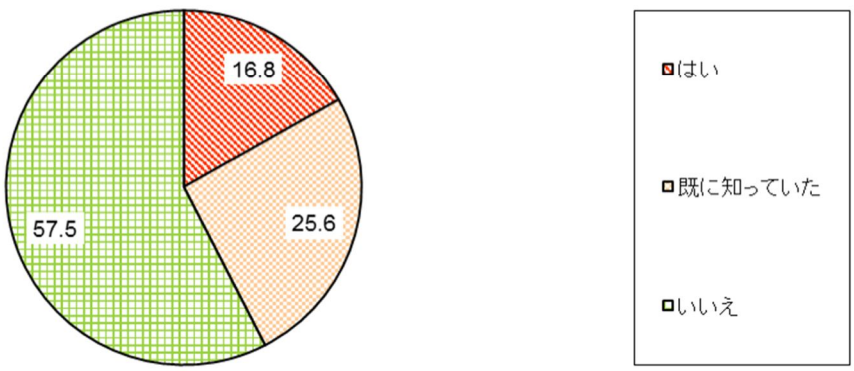


図9　Q13「不必要に抗生物質を飲んではいけない」といった情報は、あなたは最初にどこで知りましたか。（回答は1つ）

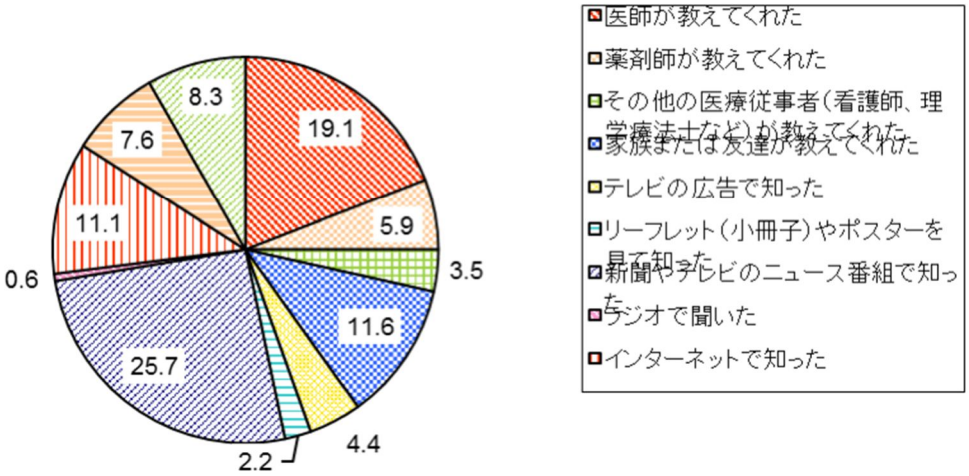
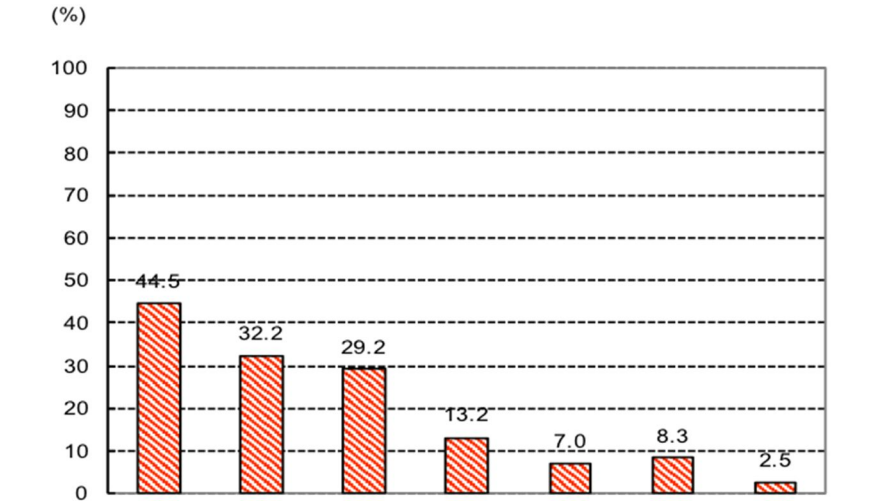


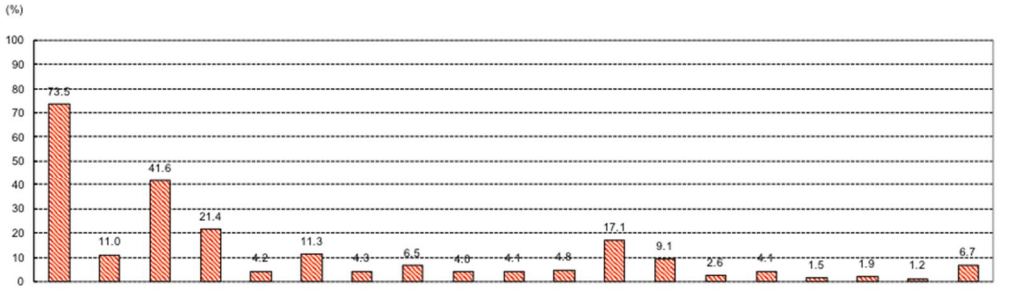
図10　Q15「不必要に抗生物質を飲んではいけない」といった情報を得たことで、あなたの考え方は具体的にどのように変わりましたか。（回答はいくつでも）



n=	抗生物質が必要だと思うときには、必ず医師に相談するようになった	自己判断で抗生物質を使用することがなくなった	医師からの処方でない抗生物質を飲まなくなった	（次に調子が悪くなった時のために）抗生物質があまってもとっておくことはやめた	その他	何も変わっていない	わからない
848	44.5	32.2	29.2	13.2	7.0	8.3	2.5

図11

Q16 あなたが抗生物質に関するきちんとした情報を得ようとするとき、利用する情報源は何ですか。最大3つまで教えてください。（回答は3つまで）



n=	医師	看護師	薬剤師	病院	その他の医療機関（クリ	薬局	家族または友達	個人や企業等が発信するイ	自治体・保健所・医師会等	政府機関または厚生労働省	国立感染症研究所のイン	その他の健康関連のイン	テレビ・ラジオ	「家庭の医学」などの健	新聞または一般雑誌	健康関連の雑誌	その他（自然に耳に入っ	抗生物質に関する情報を掲	わからない
3,390	73.5	11.0	41.6	21.4	4.2	11.3	4.3	6.5	4.0	4.1	4.8	17.1	9.1	2.6	4.1	1.5	1.9	1.2	6.7

図12 Q17 あなたは、薬剤耐性という言葉を聞いたことがありますか。

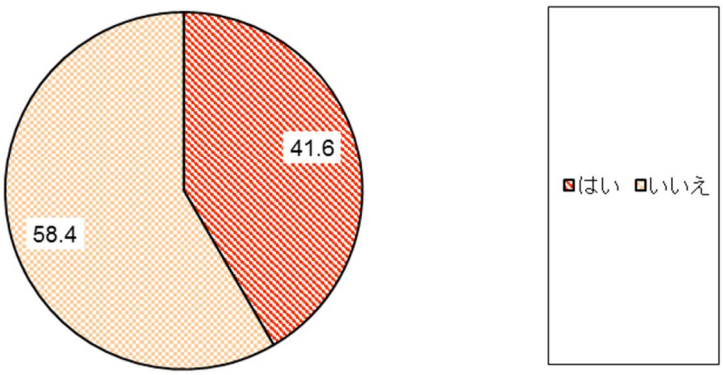


図13 Q18 次の内容について、あなたはどのように思いますか。（回答は1つ）

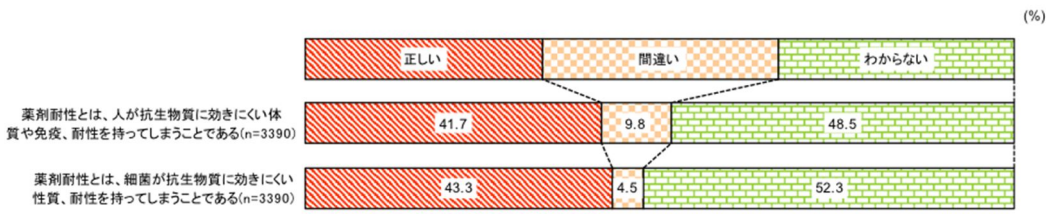
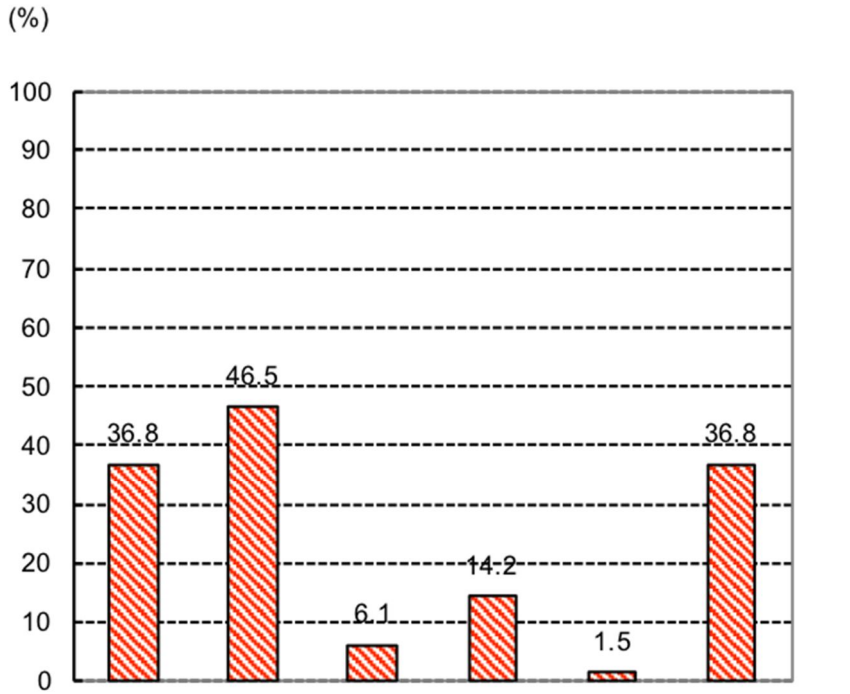


図14

Q19 あなたは、薬剤耐性の原因は何だと思いますか。（回答はいくつでも）



n=	抗生物質の不必要な使用	抗生物質の過剰な使用	病院の対策不足（病院内での手洗いの不徹底や、薬剤耐性の発生状況の確認不足など）	治療中に抗生物質をやめる	その他	わからない
3,390	36.8	46.5	6.1	14.2	1.5	36.8

文 あなたは、薬剤耐性の原因は何だと思いますか。（回答はいくつでも）

抗菌薬※1に関する調査票

この調査は、薬剤耐性対策アクションプランの一環として、一般国民から無作為抽出された方に回答をお願いするものです。

この調査により得られたデータは活用させていただく可能性もありますが、個人が特定できるような情報は一切公表いたしませんので調査回答者のプライバシーは守られます。また、本調査にご協力いただけない場合であっても、いかなる不利益も発生致しません。

※1：「抗菌薬」とは、感染症の治療薬として処方されるお薬で、抗生物質等を含む薬の総称です。
この調査で「抗菌薬」とは、錠剤・粉末・シロップなどの形状を問わず、すべての抗菌薬を指します。

属性）この調査票に回答された方について、該当する番号を回答欄にご記入ください。		回答欄
①性別	1. 男性　2. 女性	
②年齢層	1. 24 歳以下　2. 25 歳以上 39 歳以下 3. 40 歳以上 54 歳以下　4. 55 歳以上	
③最終学歴	1. 中学卒　2. 高校卒　3. 短大・専門学校・高専卒 4. 大学卒　5. 大学院卒　6. その他	
④インターネットの使用頻度	1. 毎日使用する　2. たまに使用する　3. ほとんど使用しない	

問1）貴方が服用した抗菌薬について、該当する番号を回答欄にご記入ください。		回答欄
1a. この1年間で何らかの抗菌薬を服用しましたか	1. はい　2. いいえ（→問 2 へ）	
1b. 上記 1a.で「1. はい」と答えた方に伺います。いちばん最近飲んだ抗菌薬は、どこで入手したものですか。 （1つだけ選んでください）	1. 病院から処方された 2. 診療所の医師から処方された 3. 以前に処方された薬の残りを使った 4. 処方薬ではない薬（一般薬等）を飲んだ 5. どこからも処方されていない薬を飲んだ（インターネットで購入したなど） 6. よく覚えていない 7. 分からない	
1c. 上記 1b.で抗菌薬を飲むことになったのはなぜですか。 （あてはまる番号すべてを選んでください）	1. 肺炎　2. 気管支炎 3. 鼻咽頭炎（鼻腔と咽頭粘膜の炎症） 4. インフルエンザ　5. 風邪 6. 咽頭痛　7. 咳 8. 発熱　9. 頭痛 10. 下痢　11. 尿路感染症 12. 皮膚感染症または創部感染症 13. その他　14. 分からない	

問2）以下の各文の内容について、貴方はどのように思いますか。最もあてはまる回答の番号1つを回答欄にご記入ください。		回答欄
2a.① 抗菌薬はウイルスをやっつける	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	

2a.② 風邪やインフルエンザに抗菌薬は効果的だ	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	
2a.③ 不必要に抗菌薬を使用していると、その抗菌薬はいつか効かなくなってしまう	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	
2a.④ 抗菌薬には副作用(下痢など)がつきものだ	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	
2b. 「次の世代にも抗菌薬の効果が続くよう、誰もが抗菌薬の乱用に気を付けるべきだ」	1. 同意する 2. どちらかといえば同意する 3. あまり同意できない 4. 同意できない 5. 分からない	

問3) 以下について、最もあてはまる回答の番号1つを回答欄にご記入ください。		回答欄
3a. この1年間で、「不必要に抗菌薬を飲んではいけない(例えば、風邪やインフルエンザの際に服用してはいけない等)」といった情報を知る機会がありましたか。	1. はい　2. 既に知っていた 3. いいえ (→問 4 へ)	
3b. 上記 3a.で「1. はい」「2. 既に知っていた」と答えた方に伺います。 「不必要に抗菌薬を飲んではいけない」といった情報は、最初にどこで知りましたか。	1. 医師が教えてくれた 2. 薬剤師が教えてくれた 3. その他の医療従事者(看護師、理学療法士など)が教えてくれた 4. 家族または友達が教えてくれた 5. テレビの広告で知った 6. リーフレット(小冊子)やポスターを見て知った 7. 新聞やテレビのニュース番組で知った 8. ラジオで聞いた 9. インターネットで知った 10. その他 11. 分からない	
3c. 上記 3b.で情報を得たことで、抗菌薬への考え方が変わりましたか。	1. はい 2. いいえ (→問 4 へ) 3. 分からない (→問 4 へ)	
3d. 情報を得たことで、具体的にどのように変わりましたか。 (あてはまる番号すべてを選んでください)	1. 抗菌薬が必要だと思うときには、必ず医師に相談するようになった 2. 自己判断で抗菌薬を使用することがなくなった 3. 医師からの処方でない抗菌薬は飲まなくなった 4. (次に調子が悪くなった時のために)抗菌剤が余ってもとっておくことはやめた 5. その他 6. 何も変わっていない 7. 分からない	
問4) 以下について、あてはまる回答の番号を回答欄にご記入ください。		回答欄

4. 貴方が抗菌薬に関するきちんとした情報を得ようとするとき、利用する情報源を教えてください。 (最大 3 つまで選んでください)	1. 医師 2. 看護師 3. 薬剤師 4. 病院 5. その他の医療機関(クリニック、歯科診療所等) 6. 家族または友達 7. 政府機関または厚生労働省のインターネットサイト 8. 国立感染症研究所のインターネットサイト 9. 国立国際医療研究センターのインターネットサイト 10. 保健所のインターネットサイト 11. その他の健康関連のインターネットサイト 12.「家庭の医学」などの健康医学百科 13. 独立行政法人の公衆衛生機関・機構 14. 新聞または雑誌 15. 健康関連の雑誌 16. その他(自然に耳に入ってきた等) 17. 抗菌薬に関する情報を得ようとは思わない 18. 分からない	

問5) 以下の各文の内容について、貴方はどのように思いますか。またどれが当てはまりますか。
最もあてはまる回答の番号1つを回答欄にご記入ください。

		回答欄
5a.① 薬剤耐性(抗菌薬耐性)という言葉を聞いたことがある	1. はい　2. いいえ	
5a.② 薬剤耐性(抗菌薬耐性)とは、人が抗菌薬に効きにくい体質、耐性を持ってしまうことである	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	
5a.③ 薬剤耐性(抗菌薬耐性)とは、細菌が抗菌薬に効きにくい性質、耐性を持ってしまうことである	1. 正しい　2. 間違い　3. 分からない	
5a.④ 薬剤耐性(抗菌薬耐性)の原因は何ですか (あてはまる番号すべてを選んでください)	1. 抗菌薬の不必要な使用 2. 抗菌薬の過剰な使用 3. 病院での感染コントロールの不良 4. 治療中に抗菌薬をやめる 5. 分からない	
5b. 自宅に抗菌薬を保管している	1. はい　2. いいえ	
5c. 治療中の抗菌薬を途中でやめたことはありますか	1. はい　2. いいえ	

質問は以上です。 最後まで調査にご協力いただきありがとうございました。